

平成十七年十一月十二日付け

朝日新聞第十三版三十九面の記事

見出し五段抜きで

「老老介護悲しい結論」

サブ見出し

「毛筆の遺言「財産、市に」」

横書きの見出し

「夫婦 旧火葬場で心中か」

同じく横書き見出し

「認知症の妻案じ」

事件は福井県大野市に起こったので、その地図が小さくあり、また、写真もあり、その説明に「老夫婦とみられる遺体が見つかった旧火葬場の炉。入り口には、二つの花束がたむけられていた」とあります。

以下記事本文を読みます。

老夫婦はなぜ、このような形で最後を迎えたのだろうか。福井県大野市の旧火葬場で七日、焼けて白骨化した二遺体が見つかった。県警は歯の治療痕から、うち一人を近くの男性（八〇）と断定した。もう一人は行方がわからない妻（八二）とみている。妻は重い病気だ

った。将来を悲観した心中の可能性が高い。遺言状に記された日付から、男性は一年以上も前から死の準備を進めていたことがうかがえる。

旧火葬場は集落の外れにある。遺体が見つかった炉は数十年使われていなかった。発見者によると、炉のそばには男性の車がエンジンをかけたままの状態で止まり、クラシック音楽が流れていたという。県警が発見した時、火はまだくすぶっている状態だった。車内には、数枚の給油伝票に殴り書きした「遺書」があった。

「午後八時、妻と自宅を出る」、「炭とたきぎで茶毘（だび）の準備をする」
「七日午前零時四十五分、点火します。さようなら」

自宅の日記帳にも「妻と共に逝く」との記述があった。

炉には観音開きの鉄製扉がある。内部は大人二人がようやく入れるほどの大きさ。表の取っ手にひもを結んだ形跡があった。炉に入った後、ひもを引き寄せ、内側から重い扉を閉めたよう

だ。

炉内からは、二人分の遺体を燃やすのに十分な炭化した大量の木片が見つかった。炉に入る前か、狭い炉内で火を付けたとみられる。

関係者によると、二人は、男性が勤務先を定年退職した後、所有する田畑で米作りなどして暮らしていたという。

妻は数年前から足が不自由で、重度の認知症だった。子どもはいなかったが、近所の住民は「周囲がうらやむほど、奥さんを可愛がり、熱心に介護をしていた」と口をそろえる。週二回のデイサービスには男性が送り迎えすることが多く、妻の白髪はいつもきれいに染め上がっていた。

近所付き合いは多いほうではなかったようだ。ある福祉関係者は、男性はきちょうめんで、あまり周囲に頼ろうとしない人柄だったと語る。

夫婦が最後に施設を訪れたのは十月二十八日、普段と何ら変わらない様子だった。しかし、その翌週は男性から二度、「今日は休みます」と連絡が

あった。

遺体で見つかった翌日の八日。封書に入った男性の遺言状が、郵送で市役所に届いた。

民法に定める体裁にのっとり、和紙に毛筆で丁寧にしたためた遺言状には、所有する自宅や田畑、山林などを面積も含めて列挙し、すべてを市に寄付するとあった。日付は昨年で一年以上前だった。消印は今年七月七日、二人で自宅を出た六日に投函されたらしい。

ある施設職員は「責任感の強い人でした。妻を残して逝けないと思い詰めていたのでしょうか。最後になぜ相談してくれなかったのか」と悔やんだ。遺言状の話しを聞くと、「そんなに前から死ぬ準備をしていたなんて。きちょうめんなあの人らしい」と目を伏せた。以上で新聞記事は終わりです。

最後に私の思いを歌わせて頂きます。
自らに煙となりし老いの連れ

蓮のうてなで語り合えかし